



鳥取県西部地震後の地域づくり活動 ～日野ボランティア・ネットワーク(ひのぼらねっと)の取組み～



2015.2.27 山下弘彦 hinovnet@ybb.ne.jp
日野ボランティア・ネットワーク／鳥取県西部地震展示交流センター

鳥取県西部地震と日野町

鳥取県西部地震：日野町

*2000年10月6日

13:30発生

*M7.3、最大震度6強

*死者・行方不明者なし、
負傷者14人

*1,515戸全世帯、
全壊・半壊・一部損壊

*最大時930人避難所へ

鳥取県日野郡 日野町



被災当時(2000年)

人口：約4,500人

高齢化率：約35%

財政悪

現在(2014年)化...

人口：約3,500人

高齢化率：約42%



2000年10月6日、13時30分
「鳥取県西部地震」発生
マグニチュード7.3
日野町は震度6強

当夜からおにぎりの炊き出しをする自治会 避難所を自主的に運営する住民



避難所・仮設住宅～在宅者も含めた支援

避難生活も暮らし
: 暮らしの視点で環境
整備、避難生活後の
暮らしを視野に



様々な形で、何とか
すごせる地方の暮らし、
支援が必要な被災者に
いかに目を向けるか





自治会長・民生委員が奔走
保健師も、避難所に自宅に
訪ね、ケアに努めた



日野町での被災後の動き

- 過疎高齢化が進んだ中山間地、「顔が見える関係」が安否確認や救助活動に奏功、しかし地元だけでは...
- 「日野町災害ボランティアセンター」開設(10月8日)
 - ボランティアセンターがない小規模な日野町社協
 - 鳥取県社協が中心、県内社協、中国・近畿ブロック社協の支援を受けて運営(実質3拠点体制)
- 高齢化が進んだ町、長期的な支援が必要！
 - 災害VCを年度末まで設置、11月中旬～3月末、コーディネーター3人を配置(緊急雇用)、役場職員やボランティアの支援
- 遠慮や警戒→少しずつボランティア活動が定着
 - 当初、「困っていることはない」「自分でやらないと」の壁



ボランティアの活動



仮設住宅への引越し手伝い・花のプレゼント・食事会



「生活復興」にかかる長い時間

西部地震から1年



西部地震から5年



西部地震から5年半



西部地震から5年半、蔵の
地震被害、豪雪で長屋ひさしも
「できるだけ自立した暮らし
を」それを支えるのは…

日野ボランティア・ネットワーク(2001年4月～)

鳥取県西部地震(2000)を契機に、町内外ボランティアで結成
「鳥取県西部地震展示交流センター」受託運営(事務局設置)

●日野町内を拠点とした活動

災害復興活動→被災後の地域づくり活動
子ども～高齢者の地域交流活動(見守り)
居場所づくり活動、不登校・未就業者支援

●日野町内外で、西部地震・

その後の活動経験を生かす活動

被災者支援活動(被災現場で)

被災者支援活動の普及(平常時)

ボランティア(支援活動者)のつながりづくり

活動記録:3冊の冊子に



「鳥取県西部地震展示
交流センター」運営



組織の仲間が参加した災害時のボランティアに関わる活動

救援・復興ボランティア、災害ボランティアセンター運営支援、
復興地域づくり支援など（災害ボランティア活動支援プロジェクト会議派遣など）

2000/10 鳥取県西部地震/日野町

2001/ 3 芸予地震

2003/ 7 宮城県北部地震/南郷町

2004/ 7 福井豪雨/美山町

↑ ボランティア

2004/10 兵庫県豊岡市水害/豊岡市・出石町、新潟県中越地震/川口町など

2006/ 1 平成18年豪雪/日野町

2006/ 7 平成18年7月豪雨/日野町・出雲市・鹿児島県北部

2007/ 3 能登半島地震/輪島市(・門前町)・穴水町

2007/ 7 中越沖地震/柏崎市(・西山町)

2008/ 6 岩手・宮城内陸地震/栗原市

2009/ 7 平成21年7月中国・九州北部豪雨災害/防府市

2009/ 8 平成21年8月台風9号災害/美作市

2011/ 3 東日本大震災/宮城県内、岩手県陸前高田市

2011/ 9 台風12号災害/三重県紀宝町

2012/ 7 九州北部豪雨/福岡県内・八女市

2012/ 8 京都南部豪雨/宇治市

2013/ 8 山口県・島根県豪雨/山口県萩市・島根県津和野町・江津市・浜田市

2014/ 8 広島県豪雨/広島市

↓ ボランティア＋
センター運営支援

鳥取県西部地震の被害、そして復旧・復興に必要な本質は？

- 住民から語られない、
私たち支援者が求められていること –



苦労しておじいさんが残してくれた屋敷だから、さびしくても守っていかんと。自分が守らないと、墓を守る者もいない。

過疎高齢化が進んだ地域の被災。「今日はにぎやかでうれしい。息子ができたみたい」・・・ボランティアの役割は、ただ片づけをしたり修繕をしたり、ということだけか？災害時の支援とは？？

西部地震直後に「顔が見える関係」が機能。だが、...

高齢者の「聞き取りニーズ調査」から

「2階は地震の時のまま」「修理は春になってから」
「ずっと笑顔が出ん」「歳だけえ、どうなってもいい」
「夫の咳払いが聞こえなくなって寂しい」
「粗大ゴミが出せない」「相談相手がない」

「人さまに迷惑をかけてはいけない」

「自分のことは自分でしないとけない」

1) 物理的・精神的に未だ続く地震の影響、2) 住民にとって配偶者の死去、健康など様々な課題と絡み合う被災の課題、3) 地震前から解決しないままの生活課題、気兼ねなく相談したり頼んだりできない暮らしのこと...

高齢化が進んだ町に、被災で大きなダメージ

「地域コミュニティ」も綻びを見せているのではないか



日野町の復興課題は？被災後、 地域課題の解決のために...

- 継続的な高齢者のケア
 - 高齢者見守り(個々の状況把握・共有と課題解決)
 - ボランティア意識を町に引き継ぎ、
日常的な活動を活発に
 - ボランティア活動・社会参加の場づくり
 - 地域のつながりを強め「地域力」を高める
 - 様々な団体・個人が共に活動し連携
 - 活動の発信、外部とのつながり
- 「気軽に助け・助けられる地域」に

日野ボランティア・ネットワーク～ひのぼらねっと～の趣旨

震災を契機に育ったボランティア精神を町に根づかせ、
住みよい町づくりに生かしていこう ……という、自主的な組織

1)災害ボランティアセンターの活動を支援していくこと

※現在、日野町ボランティアセンター

2)ボランティアのゆるやかな絆(ネットワーク)をつくること

3)町内にボランティアの輪を広げること

4)町外のボランティアの人達とのつながりを大切にし、情報交換をしていくこと

1)住民支援・地域支援の仕組みづくり

2)町内資源のネットワーク化

3)町内ボランティア活動推進(担い手)

4)町外ネットワークを活かす

日野ボランティア・ネットワーク～ひのぼらねっと ～の仲間：約40人（公称）

- 日野町の住民： 民生委員、行政職員、元学校教員、諸団体の活動者（食事作り、子育て、自然観察、木のおもちゃづくり...）など様々、保育園児、小・中学生も
- 日野町外： 県内外、関わり方や頻度も様々





PLAN(めざす状態)

「どんなまちに暮らしたいか？」

高齢者や障がい者、子どもなど誰もが：

- 見守られている実感→暮らしの安心感

ボランティア参加者・対象者(高齢者等)とも：

- 誰もが気軽に助け・助けられる
- 支え合って暮らす実感の持てる地域に

高齢者誕生月プレゼント企画(2002年4月～)

(「被災した中山間地の高齢者見守りとボランティア育成」)

- 70歳以上の高齢者だけで暮らす方(600人弱)を、
- 対象者の誕生月に、
- 誕生プレゼントを手づくりして訪問
 - お祝いし、喜んでもらう(元気付け・活性化)
 - 生活状況や困りごとを聞く(生活課題把握・つながり)
 - ボランティア活動や諸機関へのつなぎ(課題解決)
- プレゼント・誕生カードづくりに諸団体等協力(協働)
- 町内外、園児～高齢者まで活動に参加(参画・交流)
- 2002年4月～、現在も継続中
- 資金は、赤い羽根の共同募金など





月ごとに、様々な団体がプレゼントづくりで連携

小学生～高齢者まで多世代が、 地域を越え、活動をつなぎ参加



小学生～高齢者まで、日野町の
ほか米子市から鳥取市から・・・

子育て支援、障がい者支援・・・
様々な活動者がともに活動

被災地・輪島のボランティアの
皆さん、島根の大学生・・・縁
をつないで様々な方も参加



プレゼントづくりなど 様々な団体・個人が関わる場

プレゼントづくりは、毎月異なる団体や個人の方の協力で。



毎月の誕生カードや箸袋づくりに、老人会や障がい者就労支援施設など多くの方が関わり



多くの人の思いをこめて 「おめでとうございます！」



プレゼントにカードを添えて。
困ったときには・・・ボランティア
センターの電話番号が。

おめでとうございます！子どもの
訪問が喜ばれ、訪問した子
どもも成長



訪問結果を共有・検討 生活課題を解決



訪問した高齢者の状況を報告し、全体会でも共有。対応が必要な場合はみんなで検討

訪問で聞いてきた困りごとは、ボランティア活動や、諸機関につないで解決



生活支援につながる「訪問活動」

■ 訪問によるニーズ把握と個別支援

- 家の中は這い歩き、遠出の外出は困難な高齢女性。車を運転する夫がケガで入院。買い物に困っている状況を把握
- 町内の若者に担当になってもらい、御用聞き、あるいは電話をもらって、夫の退院までボランティアで買い物支援。

■ 個別相談でボランティア・行政支援

- 訪問時「あんたらに言っても何にもならん」と拒絶的対応。数十年ぶりUターンの高齢男性と姉の二人暮らし。元ケアマネの仲間と2人で再訪問。
- 粗大ゴミ出しについて役場に問い合わせたが埒が明かず。(吃音が聞き取れなかった?) → ゴミ出しと姉の介護認定



生活支援につながる「訪問活動」

- ゆるやかなつながり～信頼感：災害時にも
 - ふだん訪問時：「今は大丈夫、必要なときは支援を」→平成18年豪雪：把握している地域状況・世帯状況と民生委員や近隣情報に基づきスムーズなニーズ把握と除雪活動





訪問活動を切り口(器)にした地域づくり

- 中山間地域で社会参加の場、様々な交流、居場所
- 福祉教育の実践(子どもも大人も)
- 高齢者のケア
- ボランティア活動の推進、グループ活動の社会化
- 諸団体のゆるやかな連携
- 外部から、たまにであっても関われる機会づくり



- 個別状況、地域課題、問題意識の共有
- 日ごろの見守りが必要でも1人の方にとって年1回の訪問である課題→小地域での居場所、団体活動へ
- 対象を限定している不足感→施設訪問、「10年企画」でふだん訪問していない80歳以上の方を訪問

大切にしていること 多様な人が多様な関わりをもてること

- 手がかかるから多くの人に関われる(塩梅も重要)
- 多様な人の関わりで活動が豊かに、そして継続も
- 訪問対象者、ボランティアとも多様な他者と関わり

子ども～大
人まで多年
代

×

様々な団体
や人

×

町内外にか
かわらず
様々な地域

×・・・



大切にしていること

ボランティアの■■■から、〇〇さんへ

- 「わたし」から「あなた」へ、のメッセージであること
 - ボランティアから高齢者の方へ、でなく
 - 「■■■さんが来てくれた」、「■■■さんや▲▲さんがわたしを見ていてくれる」の積み重ねが、(地域の中で)ボランティアの人も見守ってくれている、という安心感につながるのではないか。



被災後の地域づくり活動、生活支援の活動

(日野町を拠点に、自主事業・助成事業・委託事業を通して)

■ 地域団体として町内・県内活動への参画・連携

- 公民館まつり、解放文化祭、町文化祭、福祉施設夏祭り、キャンドルナイト、諸委員会・・・
- 町ボランティアセンターの活動、除雪、サロンの居場所づくりなど、ボランティア活動・地域活動の担い手
- Iターン支援、都市交流事業などとの連携



被災後の地域づくり活動、生活支援の活動

(日野町を拠点に、自主事業・助成事業・委託事業を通して)

■ 子ども・若者支援

- 子どもの居場所づくり事業、不登校・引きこもり・未就業等の若者支援事業、県子どもの居場所ネット
- →現在、実質的には活動後のサポートが中心



みんなが来てボランティアをしてくれるから、すっかりきれいになった。来なくなると元に戻るから、来年も来てね。

被災後の地域づくり活動、生活支援の活動

(日野町を拠点に、自主事業・助成事業・委託事業を通して)

■ 被災経験の収集・伝承・発信・共有

- 自主事業、「鳥取県西部地震展示交流センター」受託
- 記録誌、県内外から視察(自治会・民生委員・消防団...)、県内外へ出前講座、セミナー・フォーラム、アーカイブ
- 他被災地支援と被災地間交流



●鳥取県西部地震展示交流センター／周年フォーラム

(2001年～2005年は、交流会・写真展・記録誌発行など独自に実施)

2006年 開館記念講演会「地域防災力を高めるまちづくり」

2007年「もし、再び震災が起こったら... ～中山間地における被災者支援をする側と受ける側の課題と教訓～」

2008年「防災と福祉の連携で、災害にも強い地域づくり」

2009年「被災体験を語り継ぐ ～防災の取組みへ～」

2010年 ボランティア集会「これまでの10年とこれからを語ろう ～地域活動・ボランティア活動の視点から～」

2011年 緊急リレー報告「東日本大震災支援活動」

2012年「災害の経験と地域づくり ～鳥取県西部地震、東日本大震災、そして平時の取組み～」

2013年「災害をも想定し、住民主体で地域を見直す」

2014年「子どもを守る・子どもと創る～母子・子どもと地域の防災・福祉活動を考える～」

●鳥取県西部地震展示交流センター／視察対応(2014)

県内外・21団体

●鳥取県西部地震展示交流センター／講師派遣(2014)

県内外・83講座

●鳥取県西部地震展示「交流」センター ・・・子どもがいます



被災ママに聞く！ ～子連れ防災入門編～

2014年10月4日

- ・ 子どもを連れて被災すると、どういう困難や不安があるのか。
 - ・ 鳥取県西部地震の時に妊婦だった、もしくは乳幼児を抱えたママはどんな状況だったのか。
 - ・ 実際に子どもを守ったのは？
 - ・ 防災・減災の為に日頃から何が出来なのか。
- (子連れママ、保育所所長、保健師などにインタビュー)



被災ママに 聞きました！



事例2

保育所

ママ・パパ・子ども3人(0歳5か月・2歳・5歳)・おばあちゃん

地震発生時

「昼ご飯を終えて、お昼寝させようとしていたら地震が起きて。観葉植物が落ちてくる、テレビは台ごと動く、電話は電話線が抜ける。祖母が先に出ていて、外から呼ばれていたのはわかったが動けなくて。揺れが治まるまでは子どもを抱っこするので精一杯でした。」

事例2

地震の直後

「家の中が散乱していて、おばあさんも動揺していたので近くの避難所へ行きました。真ん中の子がとても怖がって、余震の度に泣いていました。離れたがらなかったで、避難所にいた知り合いに下の子を抱いてもらって、上の子を保育所へ迎えに。あの時は保育所が近くて助かりました。」

事例2

当日の夜

「そのまま避難所で過ごしたんだけど、どうしても子どもが泣いてしまうので、とても気を遣いました。結局翌日には自宅へ戻りました。」

その後の生活

「留守を一人で守るのがしんどかったですね。何かあったらすぐ出られる準備をして気を張って……。余震の度に真ん中の子は泣くし、おばあさんもパニックみたいな状態で。」

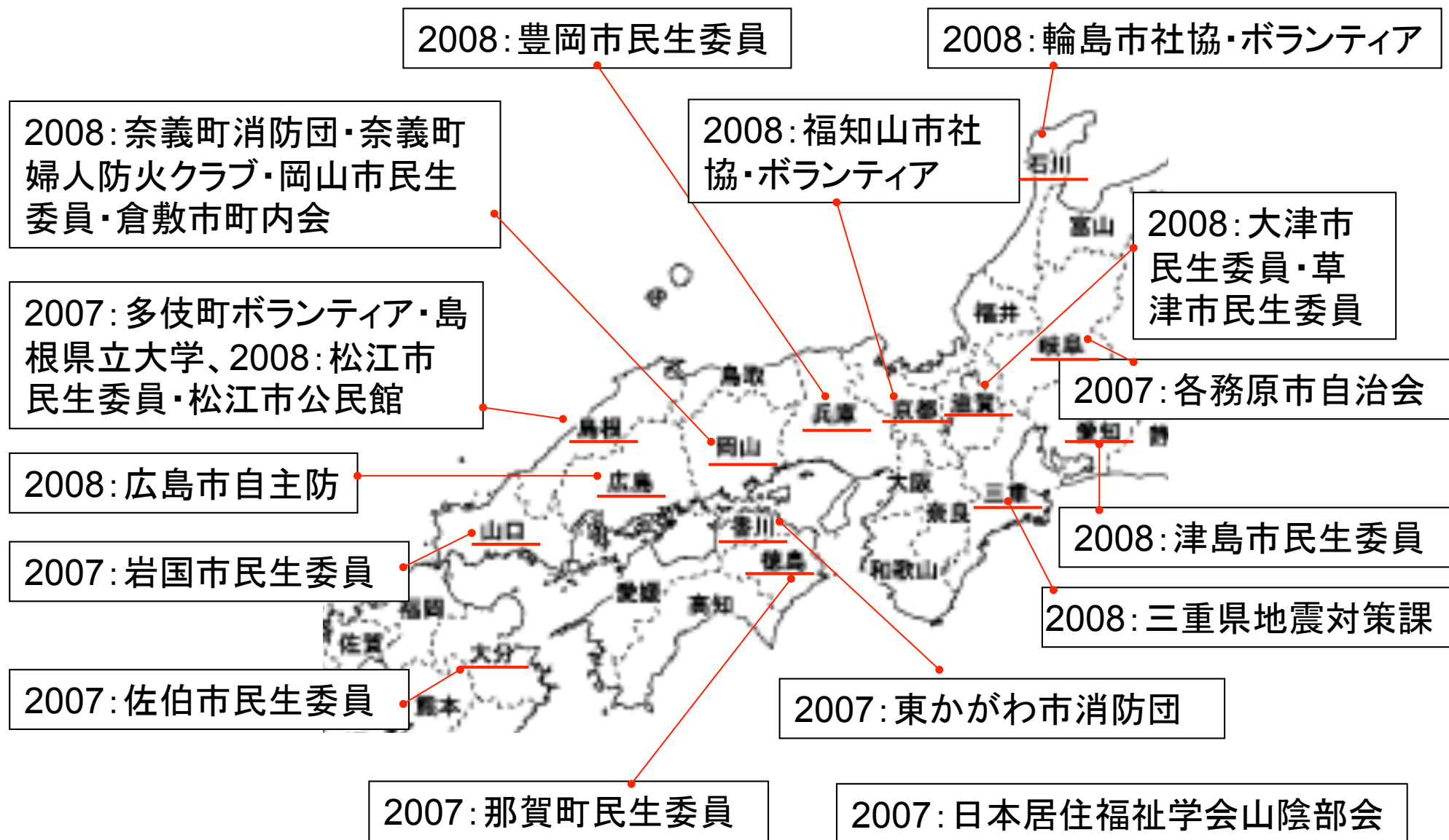
事例2

数日後にボランティアが図書館で託児をしてくれると聞いて利用しました。ライフラインの復旧が早かったのが助かりましたね。情報に関しては当事者が一番把握できていなかったように思います。」

教訓

「周り近所と顔見知りになっておくこと！ いざとなったら助けてもらわないといけない。」

県外からの視察研修受け入れ



被災後、日野町を拠点とした活動で得てきたもの

1)「見守り・見守られ、支え・支えられ」の実感

- 高齢化が進み被災した地域の高齢者を見守り、困難な暮らしを支える、一方向の視点から始めたが...
- 「被災者」、訪問を受ける高齢者、不登校だった若者、授産施設の利用者...もボランティア活動
 - 「何かできることで恩返ししたい」(家を再建した住民)
 - 「家にずっといるときは、家族がみんな先生みたいだった」(引きこもりだった若者)
 - 「ずっとボランティアをしたかった」(授産施設の通所者)
- 人生の先輩である訪問対象者からのまなざし
 - 「小さい時からえらいねえ。がんばってね」(小学生に)
 - 「あんたボランティアするようになったか」(施設通所者に)
 - 「年をとったら自分もこうありたい」(70代半ばの訪問者)

→支え、支えられる私たち

2) ゆるやかな協働連携体

- 高齢者訪問活動で町内の様々な団体・人との関わり
 - 食生活改善推進協議会
 - なかよしグループ
 - 大夢多夢
 - 舟場地区あじさいの会
 - セルプひの
 - 木のおもちゃづくり
 - たんぽぽの会
 - 日赤奉仕団
 - 菅福元気邑
 - おしどり作業所
 - 寿来の会
 - 下榎隣保館・人権センター
 - 宇田妃登美さん、生田清子さん、坂本心美さん
 - 地域おこし協力隊
 - 社会福祉協議会
 - 民生委員・児童委員協議会
 - 役場
 - 包括支援センター ...など

3) 鳥取県内、そして全国各地の地域活動・市民活動に関わる人のネットワーク

～災害時支援・研修講師などを通じて～

鳥取県内のモデル地域で取り組んできたこと

住民自らが考え取り組む防災対策の促進

○地域の取り組みが活性化し、住民一人ひとりが、
地域活動の担い手となること

（地域の福祉・防災・文化・教育・防犯・・・）

⇒住民による検討・自己決定が必要

⇒住民がプレイヤーとなる

○これにより、地域の防災活動や見守りが住民に
よって主体的・継続的に行われ、地域の防災力
・福祉力が向上すること

⇒全て住民だけで取り組むという意味ではない

鳥取県内のモデル地域で取り組んできたこと

- 集落において
- 老人クラブ等のサロン活動の場において
- 研修会等の場において

- ・ 住民が自分たちの地域の状況を認識すること
- ・ 地域の状況～課題やこれから(夢や希望)～を話し合うこと
- ・ その中で一人ひとり何ができるか話し合うこと

その場を設ける支援をし、住民が考え、自己決定できる材料提供をしていくこと

またそのプロセスを支え、助けになることが必要

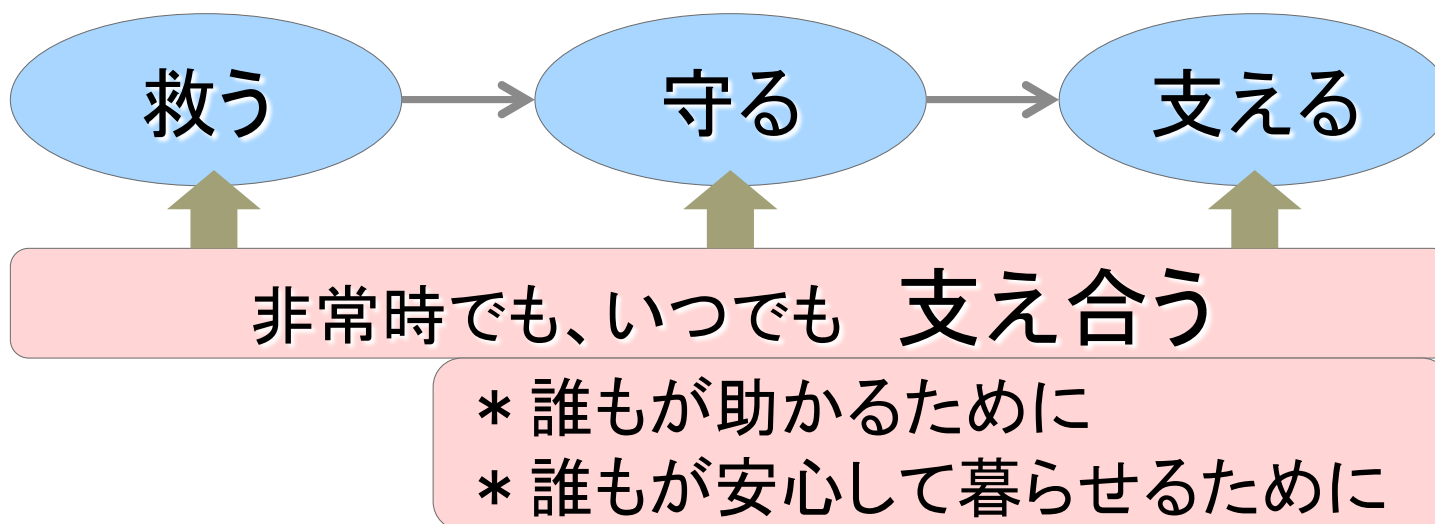
(市町村域での取り組みを県域で支援)

→ 日野ボランティア・ネットワークは、県の委託を受けて、モデル市町の社協や包括支援センターに配置されたコーディネーターの支援を行っています。(福祉部門・防災部門を中心とした協働事業)

鳥取県内のモデル地域で取り組んできたこと

- ・地図を広げて課題やこれからのことを話し合い（防災福祉マップづくり）
- ・まち歩きをし、あるいは実際に試してみたり（訓練）
- ・気がかりな方の状況を共有したり（日ごろの見守り活動）

まだまだ途上ですが、それぞれ「わが地域」なりの取り組みを、福祉と防災...をともにして進めてきています。



地図を使って地域を語る



支援をする、ということ

◆「寄り添う」ということ

- ◆ とともに苦しみ、悲しみ、喜び、希望を持ち...

- ◆ 誰も助けがない、自分一人／自分たちだけではすべてやらないといけない

 - ・・・と思うことのしんどさ(日野の除雪事例)

◆「一人ではない」「一緒に考えてくれる」

- 「誰にも迷惑をかけない」→「互いに手をかけ合う」

- ◆ 自分でできないことの支えとなり、“支えてくれる人がいる、いざというとき、助けてくれる存在がある”→住民にも、支援者に

も必要

- 
- 地域の防災・福祉において大切なこと●
 - いかに、支え・支えられるか→関係性●

■コミュニティが機能すること

- * 何らかのコミュニティへの参加実感：支え・支えられる実感
- * 「助けて」が言える状況づくり
- * 暮らしの総体の中でのニーズ把握
- * ふだんから課題解決につながる仕組みづくり

■隣近所・自治会・交流を含めた、自助的共助・共助的自助が機能すること

■非常時の様々な動きとも連携できること

本来、(おそらく)理想的にはない地域、 地域継続が困難な中山間地でのこれから

- 地域コミュニティのつながり、結び付き
- +「断絶しない」こと
- +「外部にひらく」こと
- いかに外との関わりを持ち、継続するか
 - 小地域が主体となりつつ、内部だけで取り組むのではなく
 - 外部の力を借りること、外部の風を入れることで風通し良くすること
- 地域でいかに手を携えていくか
- それでも高齢化は進んでいく
 - しんどい地域でもあきらめず、どこまでできるかではなく、必要なこと、できることを一つずつ！





行政も、社協も、NPOやボランティアも、
多様な専門職や事業者も…。それぞれが
その立ち位置での使命・役割を果たしつつ。
その強みをいかしつつ。

目的を共有し、
同じ方向を向いてつながっていく。
その方法が、約束事に則ったものであれ、
ゆるやかなものであれ、
協議し、合意をとりながら

被災していなくても厳しい状況にあった「地域」は、
こうしたことを1つずつ積み上げていくことで、
少しでも立ち直り、
暮らしよくしていくことができるのではないのでしょうか。